

関連予算を数倍にも増額し、感染性排菌患者の早期発見と「直接監視下の強化化学療法 (DOTS)」を軸にした「危機管理的」な対策を迅速に実行して「結核再興」を克服した。我が国でもこのような対応が可能かどうか懸念が残る。

もう一つの懸念は、結核対策・研究・医療の第一線を担っている人たちが、CDCやWHOのガイドラインなどはよく勉強している反面、小松氏も詳述されている我が国の先輩たちの達成した成果を無視する傾向である。優れた先輩たちの確立した「初感染発病学説」とそれに基づく結核対策の理論とは、大筋において正しかったと考える。

行政・疫学・臨床・基礎研究のどの分野にしろ、結核の領域に関連しているすべての人に、小松氏のこの著書を読んで貰いたいと思う。そして、我が国の結核病学の到達点と、それを結核対策の現場に必ずしも生かせなかった我が国の政治・行政の貧しさを知って欲しいと思う。CDCやWHOのポリシーやガイドラインは、そのうえで我が国の実情にあわせて取捨選択すべきであろう。

最後に、小松氏は殆んど独力で収集され、この著書の基礎ともなった貴重な資料を「杏医療資料館」として公開されている。資料収集にかけられた大変な御苦労と、それを公開される御宏量に対して、書評の場を借りて、小松氏に感謝と敬意を表わしたい。

(兼松 一郎)

〔清風堂書店、大阪市北区曾根崎二―十一―十六、電話〇六一

六三一六一―四六〇、平成十二年五月一日発行、A5判、四二五頁、定価本体六八〇〇円〕

岡田 靖雄 著

『歴史から見た日本の精神科医療の問題点』

『ひとは特定の間人や事柄との関連で起こることの一切について責任がある。…責任は出来事 of 構造の中に前もって示されている (Georg Picht, 1969)』

責任とは何かについて考えてみたい。ナチスの障害者安楽死計画を遂行した医師たちの行為は決して他人事ではないからだ。未だ裁かれない関東軍七三一 (石井) 部隊の医師たち、水保病の責任回避に加担してきた医師たち、薬害エイズ関係者、精神病院不祥事件を引き起こしてきた人々、そして事件にまでは到らない程度のおびただしい医療行為の数々。これらについて、ひとり一人の医師には、おのれの問題としての歴史的総括が問われていると思う。しかも総括すれば全てが落着くようなものでもなかろう。歴史的責任は、未来にわたって応えていかななくてはならないからだ。考えてみれば、おのれ自身の行為を歴史的展望のもとに、責任という観点から追求し続ける人がこの国では少ないのではなかろうか。

歴史を踏まえながら責任についてつねに追求し続けている岡田靖雄氏は、今更言うまでもないが、精神科医療史研究の

第一人者である。氏が九九年二月、比較的若い精神科診療所開業医たちの集まりで話された内容が、『精神医療史シリーズ Vol. 1』歴史からみた日本の精神科医療の問題点』と題され、大阪の一クリニクから発刊された。岡田さん自身が語られるように、氏の「二十一世紀への遺言」であり、より正確には「精神科医療史をしらべてきた人間の体験をとおしてみた日本の精神科医療の問題点」である。

お話のテープ起こしであるから文体は平易である。しかし、今日の精神医療に関わるさまざまな社会的かつ臨床医学的問題の核心が簡潔に語られ、しかも自身のあまさを総括し、はずれ者、未熟者（俳号は青人）と位置づけたうえで、「論理をつらぬくことが義であると思うが、日本には理あり和あり利あって義なし」と喝破する。医療や研究に携わる者の生き方や責任の問題、疾病論、分裂病論、学会の動き、臨床軽視の大学教師など、内容は多岐にわたたり、不誠実な権威者らを名指して批判する。彼らや問題のシステムには、内村祐之、江副勉、毫弘、土居健郎、羽仁五郎、サズほか、また、DSM, Kaplan・Sadlock のテキスト、精神神経学会、病院・地域精神医学会、児童青年精神医学会などが挙げられている。

精神や心理の書籍が売場に氾濫する今日、読むに値する本は希有だ。しかし、知行合一をつねに目指しておられる岡田さんの語りは、いま、時間的に多忙であるが思想的に怠惰な精神科医や研究者であっても、義について少しでも考えよう

とする者ならば、改めてつよくころを揺さぶられるにちがいない。一九六〇年代はじめ、ライシヤワー事件後に松沢病院医局を中心起こった精神衛生法改悪反対運動（岡田さんはリーダー格）と、それが訴えるもの、そしてそれに関連して精神科医が今日まで関わってきた日常的営為の一切が、義によって歴史的に総括されているからだ。

日本の精神医療が私宅監置を原型とし、外国に顔を向けた法制度であると規定する。また近頃の精神科医の「診断しすぎ・しゃべりすぎ」や医療機関の不正な儲けすぎを批判し、「批判的論理の再興」「日本に足をふまえてものをみる」ことを訴える。今の時代にこそ必要な書であるここに推薦する次第である。

（小池 清廉）

〔八戸ノ里クリニク、東大阪市中小阪五〇七一一七、電話〇六一六七二九一二七、平成十二年五月二十七日発行、B5判、四十七頁、頒価一〇〇〇円〕

米本昌平、松原洋子、櫛島次郎、市野川容孝 著

『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』

かねてから優生学史あるいは優生学に関する社会史的研究を個別に展開してきた四人の研究者がある種の共同研究的成